「空間の性格」で大学を生かす：建築空間提案

～空間・時間・人間とのホリスティックアプローチ～

アッセマまどか庸代

グラバア　俊子
（南山大学人文学部心理人間学科・人間関係研究センター）

笠　嶋　淑　恵
（建築家　一級建築士事務所笠嶋建築工房）

図表位置の都合で次ページから論文がはじまります。

「空間の性格」で大学を生かす：建築空間提案

～空間・時間・人間とのホリスティックアプローチ～

アッセマまどか庸代
グラバア　俊子
（南山大学人文学部心理人間学科・人間関係研究センター）
笠　嶋　淑　恵
（建築家　一級建築士事務所笠嶋建築工房）

Holistic Space & Environment: Proposition for University Education

Michiyo Assēmat (Madoca)
Toshiko Glover
(Research Center for Human Relations, Nanzan University)
Yoshie Kasajima
(Architect, KASAJIMA KENCHIKU KOUBOU)

Summary

With a viewpoint focused at the evolution of education within the university, we would like to propose in this paper some concrete models of classroom layout for the holistic research and/or learning community. It will be an effective tool in improving education in the classes on thoughts about life, human dignity and the Universe, further on the methodology of environmental study, human relations, holistic medical care, or science of human life and death, etc.

The function of 'modern Japanese universities' is not only to provide scientific method centered space, but also to provide modern university students and professors (researchers) working space to create their own contemporary concepts on humanity.

We show here the images and the concepts of the space-architecture centered around holistic paradigm shift from "how one will see it (visual value)" to "how one will feel in it (living total sense to live)" as an intellectual creative space.

We hope that the report will influence the reader to reconsider the meaning of the phrase "scientific academia" to something that favors human recognition by the physical/mental/spiritual, looking for the holistic approach to spirituality.

〈序〉

この小論では、空間的視点から大学教育を捉え、ここに提示する「空間の性格」、空間環境のもつコンセプトで、大学教育研究の場つくりや具体的教室空間を提案する。これにより、人の生命をテーマとする学問と大学教育の現代的意義や視座を呈する。

いのちへの感受性、自然や宇宙、環境への意識、価値体系の再構築が社会的に模索されている。「子どもが落ち着かない。子どもの集中力がない。その原因は日本の学校建築や環境、家庭の住宅環境がストレス要因になっているからだ。」という指摘が都立大学研究グループからなされたという。これは、学校、教室、病院病室建築、道路などの

公共施設事業及び人々の勤労や学習とストレス（働くほど、学ぶほど緊張化する）社会等、日本人の成人観・健康観（津田　2001）や生命観（まどか　2001)、教育環境、環境心理（川浦　2000）の問題意識と実践的提言のテーマである。

教育は人間観の仕事である。地球次元の空間設定や時間管理や人間の生活設計もその時代の「人間の観方や価値観」等によって異なる。「大学を作りましょう」というと、従来の「学校」「大学の教室」という平面的な意識に基づく、いわば、面積規模要求に答えるプロトタイプが大量生産されてきた。大学の建物・大学講義室という「規格品」（清水建設　1998談）は、「学問」規格の発想・コンセプトが変われば、プロトタイプも変化しうる。平面的な意識から、空間意識、更には、空間の性格の差違へと、発展することが望まれる。

その学校又はその学問のメッセージやコンセプトを「空間」で表現し、更に、空間表現の「仕掛け」そのものからメッセージや新たな次代のコンセプトが醸し出される。それが、その学習研究共同体の育成や大学教育につながる、という教育方法（表現法）を模索してみた。建築家、笠嶋淑恵による空間提案を得て、報告者達の手がけてきたホリスティックな自己探求の場としての教室空間とはどのようなものか、また、今後将来構想的にどのような教室空間が求められるか？人智学的見地（高橋　1985）から言うならば、学習・教育行為と空間環境は密接な関係にあると捉えられている。

学校など公共建築は、「更新時が肝心」「初めが肝心」である。建物や空間は年月とその時代の人々の意識（時代意識）がずれていたり、世代のギャップや時代遅れということが、施策過程（誰達がプランし、施策政策化するか）で生じやすい。空間設計がその時間内にその時代の人間の「教育環境」として実現するとは限らない。学生・学者・現場の教師／学生・運営・管理、そこに集い生きる人々の考え方・感じ方・関わり方・生活スタイル・スキルが施策プロセスで意識化される。（註ｉ）

カトリック男子修道会を母体とする設立後27年間の南山短大人間関係科（1974－2000）というユニークな学習研究共同体及び新設２年目の南山大学心理人間学科・人間関係研究センター（2000－）での一部カリキュラムに全国に先駆けた「体験学習法 Experiential Learning, Laboratory Method」（南山短大　1984、立教大キリスト教教育研究所 JICE、註ii）がある。科学者研究共同体の機械論的からシステム論的生命観へのパラダイムシフトの時期に重なる。ひとのいのちの実感や人間関係が、実際に生み出されやすい体験学習の教育方法はその特徴を生かすための教室空間として、創設当初は体育館を代用したり、図書館を改築し約50平米の絨毯敷き床教室として改築活用した歴史がある。当時は斬新な試みであった。「本ではなく人と直接出合う教育変換、人と自分に向かい合う教室空間」といえる。机と椅子と書籍のない教室。人間関係や関係的自己存在の実感の生まれやすい体験学習法の人間観による教育実践や研究は、学問の発想の変革を伴い、自ずと教室空間の形や構造、学生の学び（knowledge から awareness へ）やライフスタイルの変化を促がす。（本文Ｉ）

大学教育において、空間という視点で志向されるコンセプトや新たな価値観は何か。報告者は、高等機関や社会人教育においては、「人間関係の体験学習」、「ボディワーク」（グラバア　1988）や「ホリスティックな医学教育」と「生命論ワーク」（まどか　1990）などに携わった。全人的教育は本学でも目指されている教育理念である。「全人」的という視点は、時代によって様々な表現であるが、日本では、1970年代「生命」科学台頭と平行して、機械論に対して生命システム論的または「ホリスティック」という発想が蠢き始めている。ＷＨＯ世界保健機構のスピリチュアリティ（霊性、和語：いのち、たましい）に関する健康の定義の見直し（1999）は、同時に、半世紀にわたる西欧中心の人間像（physical/mental/social/spiritual well-being）の見直しでもある。

ここでは現代の大学を、単に、教わる理論と応用（講義 Lecture と演習 Practice)、科学的教育研究中心にのみ捉えずに、その時代の大学生・大学人の人間観の創造的仕事場、生命の場としても尊重する。ホリスティックな生命環境・知的創出の場として、「**どう見えるか（視覚）から　どう感じられるか（感覚系の全体）**」（笠嶋　1987）への**生命論的パラダイムによる空間**を探究したので、ここに紹介する。（本文Ⅱ文責　笠嶋淑恵）活用されることを期待する。

これにより、学問と大学教育の現代的意義や「からだ・こころ・かかわり・いのち」即ち、人間の身体的・精神的・社会的（人間関係性）及びスピリチュアリティというリアリティへのアプローチ視点を探る。（本文Ⅲ）

Ⅰ．高等教育を空間的視点から見る経緯　～実感ある教育の立場から～　T. GLOVER

１．教育空間研究の発端

教育空間という、従来の大学教育を考える上では余り注目されてこなかった領域を取り上げることになったのは、南山短期大学人間関係科が南山大学に移り、新しく心理人間学科を立ち上げることになったのがきっかけである。

それまで人間関係科は「教育の冒険」（山口）を標榜し、教員チームによるチームティーチングを機軸に据え、チェンジエージェント（change agent 社会の変革子）の育成を目指した教育プログラムを展開してきたのである。それは高等教育に体験学習という新しいコンセプトを導入した、まさに教育の冒険であった。科の設立は1974年であるが、当時は学生運動という世界的な潮流の中で、新制大学のあり方が問われた時代であった。日本での課題は①教育の民主化、つまり大学の民主的な運営と教育システムへの学生の参加、②教育における人間性の回復、つまり学生の個としての主体性の尊重であった。人間関係科の冒険はそうした問いに応答しようという試みでもあった。

そこで展開されたのは固定化したシステムや教育プログラムではなく、常に学生からのフィードバックと時代のニーズに応えようという試行錯誤であった。社会に対しては、人間関係研究センターという、地域社会に開かれた研究と実践の場を設けた。常に新しい可能性を探索し変化し続けてきた27年間であった。

人間関係は学問領域としてまだ新しいだけでなく、領域としての特殊性があった。それは、教育の場に常にフィールドが持ち込まれるということである。人間関係を学ぶということは、人間関係についての知識を得ただけでは学びを達成したとは考えられない。やはり学習者が実際の人間関係において、自己成長したかが問われるのである。当初から人間関係「学」科としなかったのは、そうした理由がある。教育の場では常に、学習者自身という、生きて変化しているフィールドと、学習者同士そして学習者と教育者の人間関係という、今ここで起こっている関係をフィールドとして取り込まざるを得ないのである。

現在の大学が直面している課題を概観すると、約30年前に突きつけられた問いに幾つ応えられたのかと、問い直さざるをえない。

そう考えると、今、27年間の教育の冒険の成果を収穫し、吟味し、その中の良き果実の種を広く関心と必要のある所に届けることは、意味あることであろう。そうした果実の一つが「教育空間」という、新しい視点であった。

２．南山短期大学における空間が持つメッセージと、教育空間の重要性

人間関係科の原点にあるのは、人間関係トレーニングまたは感受性訓練と呼ばれる、集中的なトレーニングである。そこでは「文化的孤島」という環境設定が非常に重要な意味を持っていた。科の成り立ちに既に、空間としての物理的な環境が、個人の感情の在り方や安定度、学習者同士のかかわりやグループとしての精神風土などに影響を与えるとの認識が、内包されていたと言えよう。

学習の場がフィールドとなる体験型の授業では、比較的自由に動き回れる空間と広い面積が必要となる。人間関係科も座布団持参で、体育館での授業からスタートしたが、図書館新築に伴い元の図書室を利用して、絨毯敷きの21番教室を確保することができた。

教育空間に対する考察は次章で行うことにして、ここでは、学生が大学の空間をどのように捉えていたかを、アンケートによるリサーチ（グラバア等　2000）から抽出したキーワードとして簡単に報告しておきたい。

キーワード１：教育力を持った空間

学生自身が次のように体験を通して空間の持つ意味を考え、その教育力を指摘している。

＊　21教室には、机も椅子もない。他の教室とは全く違う、「だだっ広ーい」絨毯の敷きつめられた部屋。その広い空間の中で授業を受けるのはとても、気持ち良い。開放的な気分になる。だから自分を出せるような気がする。それがねらいで、人間関係科が使う教室は広いのではないか（な）と思う。広い空間の中で授業を受けることは、きっと知らない間に、私たちに大きな影響を与えているのだと思う。

＊　とてもリラックスできる教室。とても体の自由が利き、開放的な雰囲気でいられる。童心にかえれる場所でもある。グループを作るときでも、身軽にすぐ移動できる点も長所の一つだと思う。そんな21教室での授業は、今まで私が持っていた“教室”という枠組みを取り外された場所であった。

キーワード２：集中とリラックスのリズムを育む空間

学生の反応を見ると、集中とリラックスのリズムを上手に使おうとしている。授業で非常に集中する。終わった時にはリラックスしたい。そうするとまた次の授業に集中できる。そういう意味で、リラックスの場所を求めているし、そういう場所を評価している。

また、授業の中にも受動的な要素と能動的な要素がある。講義形式で知識を吸収する場合は集中する必要がある。それに対して外国語会話、実習、プレゼンテーションなどは、緊張すると上手くいかず、かえってリラックスする必要がある。同じ授業でも、必要に応じて、集中できる空間とリラックスできる空間が要求されるといったことも起こる。評価の高い空間に対する「落ち着いて非常に集中して考えることができる空間」「自分に戻って考えることのできるスペース」といった記述もそうした欲求を表していると言えよう。

キーワード３：つながりを育む空間

これは学生同士のつながりだけでなく、教員、職員、学生の三者のコミュニティーを意味している。そうしたつながりのある場所を学生は評価している。つながりを形成する開放性と、それなりの仕掛けを作る必要性を考えさせられた。

キーワード４：美的で感性に心地よい空間

空間を評価する理由として「きれい」「素敵」が多く出てくる。また、学内禁煙が学校選択の要素となったという「匂い」。白い壁は冷たくてとても嫌だという「色」。ＢＧＭが流れているととても落ち着くため、ずっとかけておいて欲しいという「音」。こうした感覚的な要素に対する反応も多く見られた。

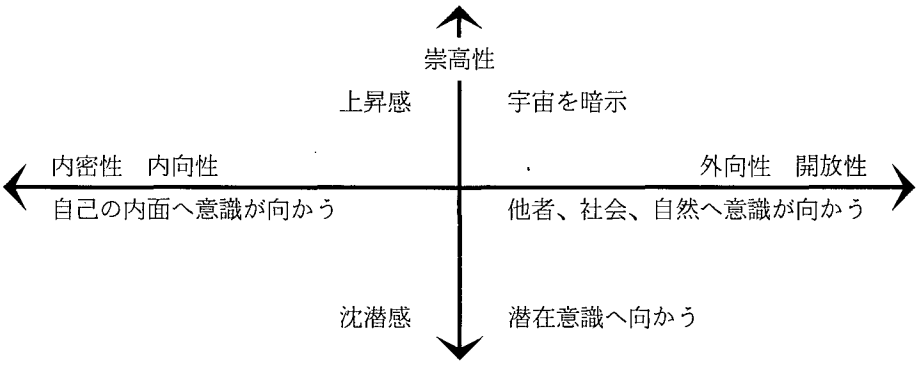
次に多かったのが「ゆったり」であった。リッラクスという要素もあるが、観察して感じたのは自分流の居方が可能な空間ということであった。廊下や階段に座っている姿。ロビーの床に心地よさそうに腹ばいになって、集中して何かをしている姿。行儀作法とは違った次元での見方が必要だと思われた。

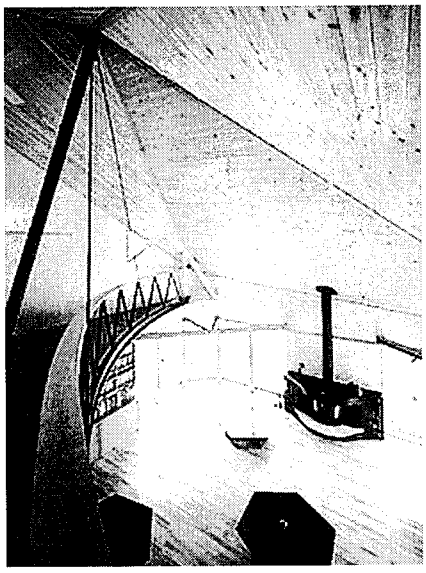
このような学生の敏感な反応には驚かされた。今後大学教育を検討していく上で、教育空間という視点は欠くことができないであろう。（グラバア俊子）

Ⅱ．大学に求められる空間の性格　～建築空間の視点から：空間提案～　笠嶋淑恵

１．「どう見えるか」から「どう感じられるか」へ

建築は、人から見られる存在であるから「どう見えるか」例えば、端正さや、新しい表現の追求等、視覚の対象と捉えられがちである。しかし、そればかりではなく、その内部空間にひとが身を置くことから、空間からひとの心理と身体に対して、言語化することは困難な、感覚系へのホリスティックな作用を及ぼすことができる。それは、空間を構成する主要素である天井、壁、床、開口部、光等の関係を、意図的に構成して、生み出される空間の性格（下図）による相互作用・相乗効果である。このような空間の性格とひとの感覚系との応答関係を仕掛けること、すなわち「どう感じられるか」を筆者は実作を通じて20数年来探求してきた。本設計提案（註ⅲ）もこのコンセプトに依っている。





ワークショップ型セミナーに対応する空間
崇高性を暗示し、内向性、外向性併存　　２つの空　　設計　笠嶋淑恵

２．空間の性格付与

先ず、空間を構成する主要素である壁を取り上げて述べる。（資料－１）

図－１に示す真っ直ぐな壁を背にする場合と、図－３、４のような緩く折れていたり、緩やかな曲面の壁を背にするのでは、ひとと空間との親和度が異なる。複数の人が居る場合、後者はより他者を認知し易く、コミュニケーションが生成しやすい。図－２に示す、性格付与が意識されていない無性格な空間、すなわち、主に面積要求や、部屋と部屋の位置関係／平面構成による旧来型の教室においては、空間からひとの心理と身体への作用として、行為や心理変化が誘発されることは無い。しかし、授業形態上の要求から、ひとの座る位置を図の右の方へ示す様に変化させることによって、より能動的な学習状況を演出することは可能である。しかし、その場合も空間と行為・状況との関係には違和感がある。南山短期大学人間関係科においても、旧来型の教室をこのように運用されていた。

ここで提案したのは、単に「豊かな空間性」と言われるような抽象的な空間からも、更に１歩先んじた「意図的に性格付与された空間」である。これは、２つに大別される。１つは図－５に示す「強い性格付与」であり、もう１つは図－６、７に示すニュアンスに満ちた「緩やかな性格付与」である。前者では、ひとの視線が自然に中心に向かう。すなわち意識の方向付けが、ある１点に向かう、明快な意識の焦点がある、強い求心性を放つ性格付与である。光が上方から落ちて来るように操作したならば、更に強い内密性が生まれる。宗教空間や瞑想の場に適する空間である。空間Ｂ多目的小教室（資料－２）は図－５と図－６の中間の性格である。

一方後者は、図－６、７に示す鈍角による不整形多角形空間と２重楕円弧空間である。図－６に示す空間は、緩やかな性格を醸し出す。空間Ｃ多目的中教室及び人間関係研究センター室として提案している。この発展型が、構成手法としてはより高度な、図－７に示す空間Ｄ多目的大教室である。これは、意図的に異なる性格を併存している。

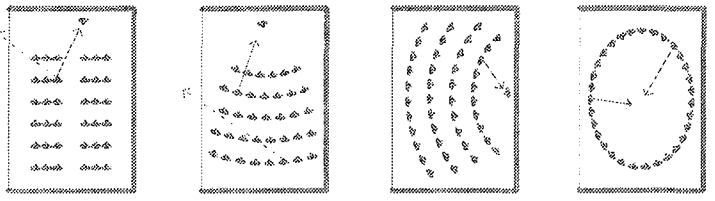
円弧は直径が大きくなるにしたがって意識の焦点がぼけて、求心性が弱まっていく。壁と開口との異なる平面形、空間の性格の差異の重ね合わせは、豊かなニュアンスを漂わせる。開口部の光の射れ具合の調整によって、開放性と内向性の度合いや意識の焦点を変化させることが可能である。すなわち、大人数のワークショップでは、このままの状態で、他者へ意識が向かい、同時に中心方向への緩やかな求心性もある。演劇等の表現行為の場として使われる場合は外側の開口部の遮光カーテンを閉め、ライティングを行い、一方に意識の焦点を作ることができる。重なりをもつ２重の壁による空間の襞は舞台空間に奥まりをもたらし、出入りにも生かされる。壁の効果はこの他に、基本的な性格として、長い壁を背にする場合、無防備な背面が守られていると感じることができる。空間に大きな壁があることによって、ひとの心理に落ち着きがもたらされ、意識の集中が自然に計られる。ひとを守り、構造体を支える役割を象徴している壁や柱は頼れる存在感をもたらし、ひとの拠り所と感じられる。これが基本的な壁が醸し出す性格で

□性格付与されていない壁

図－１

意識の方向づけが意図されていない
他者を意識しない

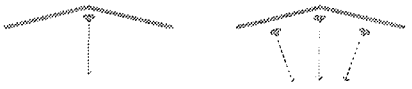
●旧来型教室・・・性格付与が意識されていない教室



受動的学び ←→ 能動的学び

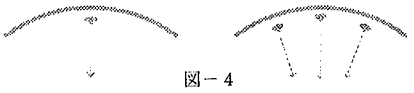
図－２

□性格付与された壁・・・緩やかな内向性　求心性　包容性　防護性



図－３

人の拠り所となる壁
意識の方向づけが緩やかに意図されている
他者を自然に意識する

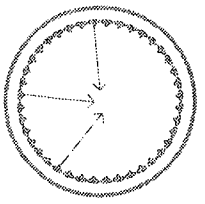


図－４

●意図的に性格付与された幾何学的整形空間

・・・強い意識の焦点

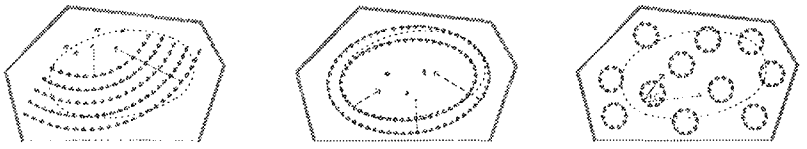
明快で強い性格、求心性



図－５

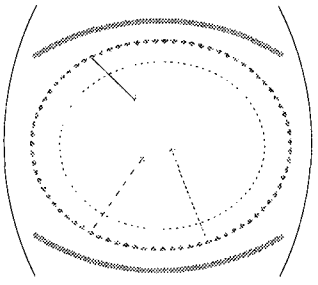
●意図的に性格付与された空間・・・ひとへのホリスティックな働きかけ

異なる性格の併存・・・行為の発展性、柔軟性に富む



受動的学び ←→ 能動的学び

図－６

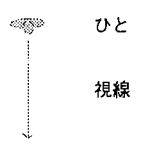


図－７

意識化
- 個－共同体
- 肉体－魂－霊
- 意識の焦点
- 緩やかな性格
- 知覚の深化・総合化

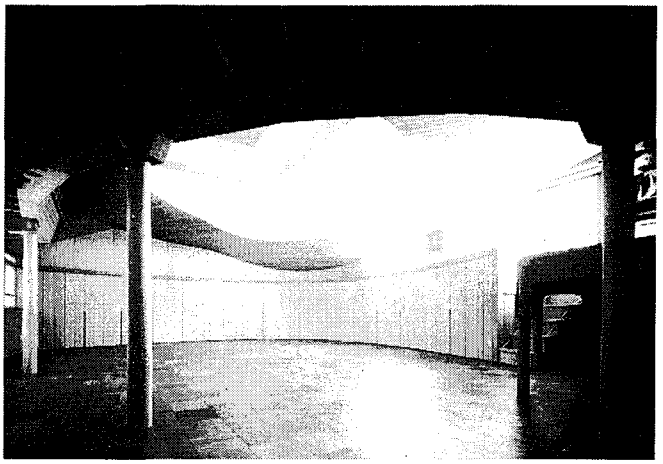
能動的学び
表現行為

凡　例



壁
開口部
ひと
視線

大学に求められる空間の性格／設計提案　笠嶋淑恵　　資料-1



意識の焦点を持つ空間
やまさと保育園　幼児劇場　　設計　笠嶋淑恵

ある。

次ぎに、天井について述べる。ひとがある空間に入った時、先ず最初に直接目に入るのは、開口すなわち光の方向や外の風景と壁であり、天井は二次的に空間の印象に影響を及ぼすような感じられ方をする。したがって空間のホリスティックな効果「どう感じられるか」を意識して空間を構想する場合、天井の形態は重要である。内向性、内密性を求める空間Ｂ多目的小教室では、壁と天井が連続する彫塑的な空間を提案した。これは洞穴を暗示する。天井は中央を高く抜き、光りで、もあっと明るくしている。これにより内向性、内密性に崇高性を漂わせることを意図している。空間－Ｃ、Ｄでは中央部の天井を高く、周辺部壁際を低めにした、ドームの近似形によって、大きく空間を覆い、ひとを包容するような性格をもたらし、コミュニケーションを経て生成される共同体を暗示している。更に、中央の高い抜けは宇宙を暗示し精神性を漂わせる。

３．「学習・研究共同体」に求められる空間の性格

本設計提案は、目的空間と非目的空間それぞれに対する提案から成っている。目的空間とは、その建築の主用途に関わる諸室のことを指し、それに対して非目的空間とは、エントランスホール、廊下、エレベーターホール等を指す。建築の可能性の開拓は、目的空間は勿論のこと、非目的空間において、主用途、当計画では大学、これに関わる人々を、大きく受け入れ、コミュニケーションを仕掛けることができるならば、主用途の影響力を強化できる。

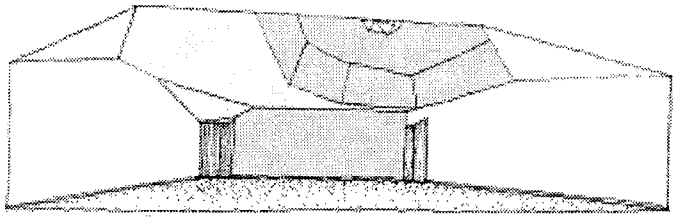
３－(1)　目的空間に求められる空間の性格

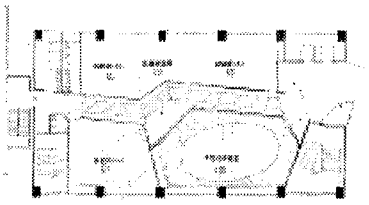
「ワークショップ型学習空間に、求められる空間の性格の提案」

南山短期大学人間関係科において25年に渡って実践されてきた特色ある授業形態と、新学科に併設される人間関係研究センターが開催する社会人講座など、ワークショップ型の多様な講座における運用も可能な大中小教室及び人間関係研究センター室、及び重要視されているスタッフミーティングのための合同研究室等、これらの、要求が少しずつ異なる各目的空間に求められる空間の性格を、資料－２空間Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅに示す具体像として提案した。すなわち、前項で述べたように、大中小教室毎に、学習形態と授業意図に応じた性格の差異化を施している。共通して言えることは、

- 教室で行われる学習に集中・没頭できる内向性
- 自己へ向かう意識から他者へ向かう意識の併存及びその割合の調整
- 「学習・研究共同体」の１員であることを暗示する包容性

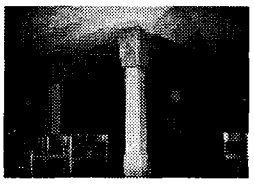
これらの基本的で緩やかな性格付与に止め、運用において更に可能性が引きだされることを期待している。





■空間 B

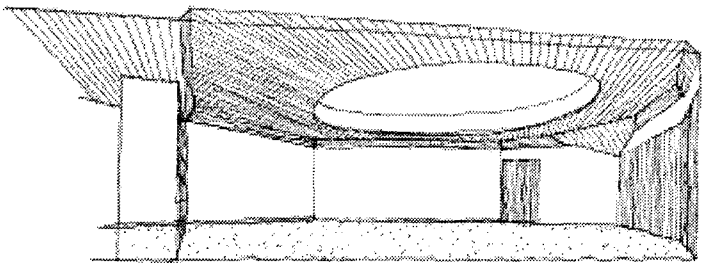
多目的小教室・・・洞窟を暗示　彫塑的空間　天井／壁一体化　内向性　精神性　崇高性



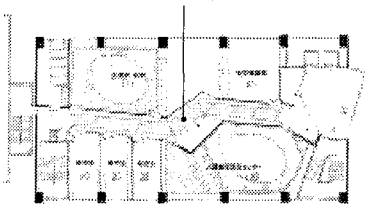
精神性をかもし出す色彩

中心性

キリスト者共同体ヘッセン社会事業体
老人集住体の礼拝室

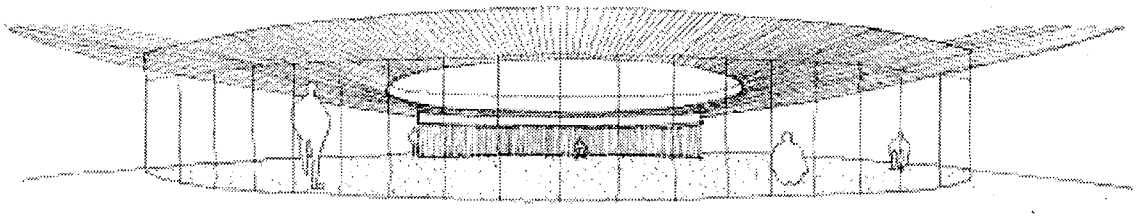


非目的空間



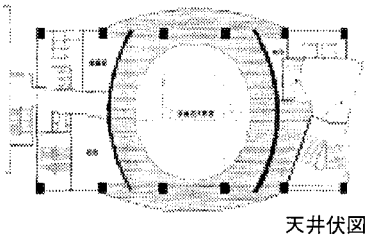
■空間 C

多目的中教室・・・天井中央の抜け一宇宙を暗示
緩やかな求心性　開放性
静的コミュニケーション
中人数ワークショップ

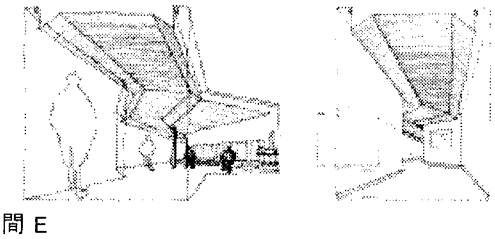


■空間 D

多目的大教室・・・天井中央の抜け一宇宙を暗示、緩やかな求心性　開放性
大小の非完結型楕円形の重なり、動的コミュニケーション
多人数ワークショップ、意識の焦点一劇場



天井伏図



■空間 E

非目的空間・・・人の溜まり　教育理念の象徴、出会い
表出、見る一見られる　帰属感一解放感

認知されやすい壁
・・・表出・掲示・出会い
交錯・方向性

フィルダークリニック
介護士養成学校（ドイツ）

行為をうながす形態
方向性・内奥性

ゲーテアヌム大ホール
出入口（スイス）

大学に求められる空間の性格／設計提案　笠嶋淑恵

資料 -2

３－(2)　非目的空間に求められる場の性格

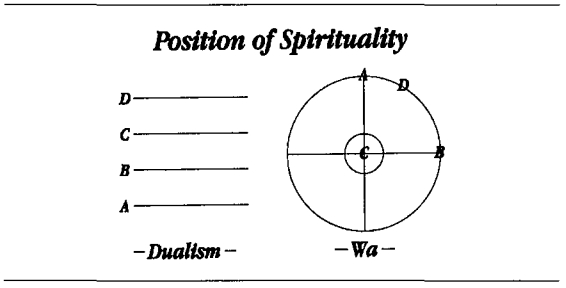
「多角的、多重的に、啓発し合う全人格的な人間関係を仕掛ける場の性格の提案」

大学が、学生と大学人による「学習・研究共同体」として成育する為に、非目的空間は、目的空間とは異なる可能性を持っている。すなわち、学習の場とは異なる、親密なコミュニケーションの契機となる格好の場を設けるのに非目的空間は適している。学生間、学生と教員、教員の間に多角的、多重的に、啓発し合う全人格的な人間関係が、廊下やエレベーターホール等の非目的空間を移行する時に、何気なく目を合わせる、目に留まる、そのようなことから自然に始まる。ひとの流れの傍らや、人の流れに曲折を付けた箇所に、アルコーブなどの小スペースとして、空間Ｅを提案した。この様な、ひとの意識が自然に向かう箇所を随所に設け、ベンチコーナー、掲示板、学科の教育理念の表出、自習コーナーとして、キャンパス内の随所に、人の溜まりが生まれる場が設けられたならば、他者を眺める→観察する→憧憬→畏敬・尊敬→自己成長の動機へと発展する機会を提供できる。その様な場が設けられていることは、異なる固有性をもつ、肉体と魂と霊の総体である人格に対して、大きく受け入れる姿勢、すなわち「親しく交わり、啓発し合いましょう」という意思の表出でもある。（Y. KASJIMA）

Ⅲ．大学教育・研究共同体に求められる発想転換　～学問・生命環境・場の視点から～　Madoca

１．（人間）存在をホリスティックに見る気運の胎動と振舞い：ホリスティックアプローチ

人間性やいのちを実践的にテーマとする教育研究共同体においては、アクティブな視点やコンセプトの提案をしたいものである。キーワードは「Space（空間、宇宙）」「Verbal, non-verbal Natural Science（見える自然科学、見えない自然科学）」であり、キーコンセプトは「Holistic（和語：まどやか、円還）に生きて死ぬる」和の大学人（まどか　2002）である。



〈Being 存在への階層的と和合的見方：研究アプローチの西欧的科学性と和の自文化的関係性〉

A. phisical 物的身体性・もの　B. mental 知的精神性・あたま・こころ　C. social 社会性（人間関係性）かかわり　C～D. spirituality 霊性、物質と精神の自己統合力、たま

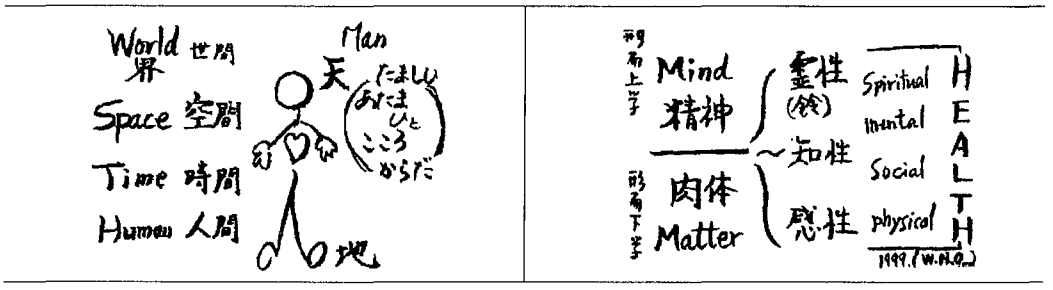
近年の知のパラダイム（トマスクーン　1976）は、機械論的生命観からシステム論的生命観（カプラ　1986）やホリスティックな生命観へ、分析的要素還元的機械論（原子論）から総合的全包括的生命論（関係論）の模索へ、及び、西洋二元的宇宙観（一）から東洋一元的自然観（○）へのシフトという、科学や時代の見方が普及した（次項の図：空間Ａ）。教育現場においては、「研究コンテントを教授する・される」科学的論理重視教育と「研究プロセスを実感・体験する場つくり」関係的生命環境重点教育とのバランスが模索されている。これは西洋科学中心の日本の高等教育機関や大学研究機関のビジョン課題である。

ホリスティックとは、ひとつのものの観方・生き方で、「全人的」「全包括的」に、こころもからだもたましいも」まるごと生きたひとつの全体系・生態系として、いのちや人や社会のかかわりを捉えていこうとする文明論的ことばである。ギリシャ語源 holos（全体）は、whole（全）/heal（癒）/holy（聖）/health（健全）＝ heal＋th（癒された状態）という意味を齎している。（日本ホリスティック医学協会　1990）

ホリスティックアプローチは、人間を One（個人）ではなく Holon ホロン（全体 whole あっての個 one、個あっての全体）と捉え、関係的存在としての人間論と生命論的発想を研く。A. ケストラー「ホロン革命」（1974）はヤヌ

ス（ギリシャ神話の二面神）にヒントを得たように、科学的と非科学的、正統と異端、常に「もうひとつの、オルターナティブな」方法や意義を意識し統合する。ホリステイックな生き方は決して二律背反ではなく、共生的・流体循環的・可逆的である。ひとのいのち・健康な生死観・ホリスティック医学・関係教育・環境教育・霊性教育・五感／六感／七観教育として実視している（まどか　1997）。

教育は、その時代の人間観の仕事である。人間観はその時代の存在論や宇宙論、即ち、時間（論）・空間（論）の制約がある。人の振舞・行動しやすい空間とは、物理的存在としては三次元から高次元時空間まで繋がり、東洋のいう「天・地・人」「知情意」のバランスがその人の中で繋がり、円還しやすい空間であろう。身体性・物質性に限定した生命科学・生命倫理・健康や医学教育は、西洋型国際社会・グローバル化に対応しつつ、科学的論理的研究方法の修得が目指された。西欧科学主流の日本の学問形成においては、相補的柱として、和の自文化や東洋的自然観や生命観に根ざした自然で健康な教育研究環境が必要である。西洋は「見える自然」星の秩序で、東洋は「見えない自然」仏意識の秩序で宇宙論を展開した。（まどか　2002）



〈現代の人間像の相〉　　現代人の〈健康の定義〉見直し（W.H.O. 1999）まで

ＷＨＯ（世界保健機構）の世界保健憲章前文は、西欧の人間観を踏まえた健康の定義と捉える。physical/mental/social 更に spiritual well-being の項目を加える試みがあったが、実際には1999年５月に現行憲章支持に留まり（中嶋　2001）、現在は各国多様な自らの文化・精神史・学問体系・価値体系を問われつつ「スピリチュアリティ」とは何かを答えていく時期である。鈴木大拙（1972、1944著）によると、霊性は、物質と精神の二元社会に必要な統合力をいう。西欧化科学化社会と身を一つにして生きなければならない戦後の日本人に向けての呈示であったという。この東洋人の発想が、ＷＨＯにヒントを齎している（中嶋・小田　2001）。医学医療は本来その国の学問のバランスある統合であり、その時代の高等教育・研究者・知識知恵ある人々が志向する人間観に拠る所が多い。

筆者等の所属、南山大学心理人間学科は構成員の出身領域でみると、体操・心操・霊操（physical, mental, spiritual training）に相当するカリキュラム展開を実行している研究者共同体・職場環境である。現代の西欧型社会は、あらゆる世界の価値観の見直しと再生の時期にあり、日本の高等教育は、現代人像の見直しの時期にある。

２．知のパラダイムシフトとその時代の人にとってのリアリティ位置の変化（資料２－空間Ａ）

時空間も人間もその時その場その人のスタイルで相互に生かされ合う。空間意識自体が本人自身と繋がらない時、「場違い」や「違和感・異文化」になる。双方に理がある。

近代的科学機械論からホリスティックな生命論発想（人の科学論理性を教育する時代かと人の生命環境関係性教育の時代）へのパラダイムという意識転換は、ライルスタイルとしてはトップダウン型上下階層性：ヒエラルキー空間（―）から内奥・内発型内外循環円還性：ホリスティック空間（○）の真理実在を想定する。

空間における真理の実在・リアリティの存在とは、例えば、「宇宙における神の位置」「宇宙における人間、自然におけるヒトの位置」（テイヤール　1942）、「地球における人間の位置付け」「科学における己の位置」（まどか　1995）というように、位置付けや認識法のテーマである。

■空間の性格と求められるホリスティック教育環境との対応（資料-2）

「どう見えるか」から「どう感じられるか」へ

空間Ａ　知のパラダイムシフトといわれるものと、リアリティの空間位置の時代意識変化 Madoca 1999

ａ）教会空間（十字架・祭壇カミの位置と司祭の向き：前方上～中央輪）

ｂ）教育空間（黒板と教壇の位置と学生机の向き：すずめ～めだかの学校）

ｃ）茶室空間（日常性と非日常性、篭る小間、物心・主客一体、内奥奥義）

ｅ）幻空間（virtualreality,internet-work,fantasy,dream,meditation, vision,visualization）

設計　笠嶋淑恵

01.醸し出される空間の性格（資料-1）

－1.壁、開口、天井の形態による、空間の性格付与

●旧来型教室

・・・性格付与が意識されていない教室

●意図的に性格付与された幾何学的整形空間

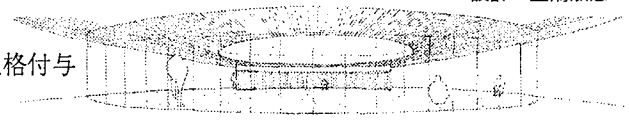
・・・限定的目的空間

・・・明快で強い性格、行為の発展性、柔軟性に乏しい

●意図的に性格付与された空間、異なる性格の併存

・・・ひとへのホリスティックな働きかけ

・・・個－共同体、肉体－魂－霊、知覚の深化・総合化



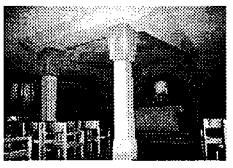
多目的大教室・・・天井中央の抜け－宇宙を暗示、緩やかな求心性　開放性
大小の非完結型楕円形の重なり、動的コミュニケーション
多人数ワークショップ、意識の焦点－劇場　空間Ｄ

多目的小教室・・・洞窟を暗示　彫塑的空間　天井／壁－体化
内向性　精神性　崇高性　空間Ｂ

－2.色彩による空間の性格付与・・・壁、天井の色彩が空間を染める

●青、紫色の靄々状塗装・・・智性、精神性、崇高性

●ピンク、オレンジ色の靄々状塗装・・・ファンタジー、庇護



精神性をかもし出す色彩
中心性

02.ひとの振る舞い・心理状態と空間の性格との対応関係

－ひとの振る舞い・心理状態－　　－空間の性格－

こもる、自己分析、瞑想・・・・内向性、内密性、閉鎖性、防護性

コミュニケーション・・・・・・外向性、開放性、包容性

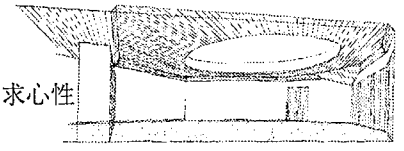
意識の集中・・・・・・・・・・中心性、求心性、防護性

緊張・・・・・・・・・・・・・規則性、強い中心性、強い求心性

リラックス・・・・・・・・・・包容性、防護性、浮遊性

出会い・・・・・・・・・・・・人の流れ、視線の交錯、折れ曲がり

表現、表出・・・・・・・・・・中心性、求心性、防護性



多目的中教室・・・天井中央の抜け－宇宙を暗示
緩やかな求心性　開放性
静的コミュニケーション
中人数ワークショップ　空間Ｃ

空間Ｂ　祠、洞窟のような空間・・・多目的小教室

全体との係わり合いの中で、意識を内向する空間・時間・人間存在

チャペル　教室　面談コーナー　茶室

古い日本家屋の屋根裏部屋　野外自然の非日常性

洞窟空間・・・時間の停止、安らかな夢想、建築の原形としての家

精神のくつろぎと魂の覚醒

「魂は静かに目覚める」・・思考の飛躍（G.バシュラール空間の詩学）

帰属感の中での自我との向き合い・自由への意志

意識の覚醒と新たな自分との現実感のある出会い

非日常性によるリラックス　リラックスによる集中

非日常儀礼空間による緊張や自律性による集中

ふるさと　温故知新　懐かしさ　人間性の解放と意識の開放

自己統合力　中心力の気づき　自分を取り戻す

認知されやすい壁
表出・掲示・出会い・交錯・方向性

行為をうながす形態
方向性・内奥性

空間Ｃ,Ｄ　個と全体の係わり合いを促す空間・・・多目的大中教室

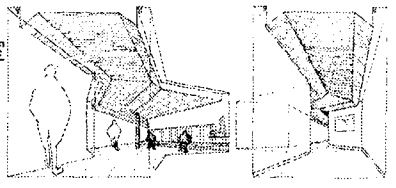
目的空間・・・一方的情報型、対話型、ワークショップ

体験学習（言語的・ノンバーバル）

空間Ｅ　個と全体の係わり合いの契機・・非目的空間、廊下、階段

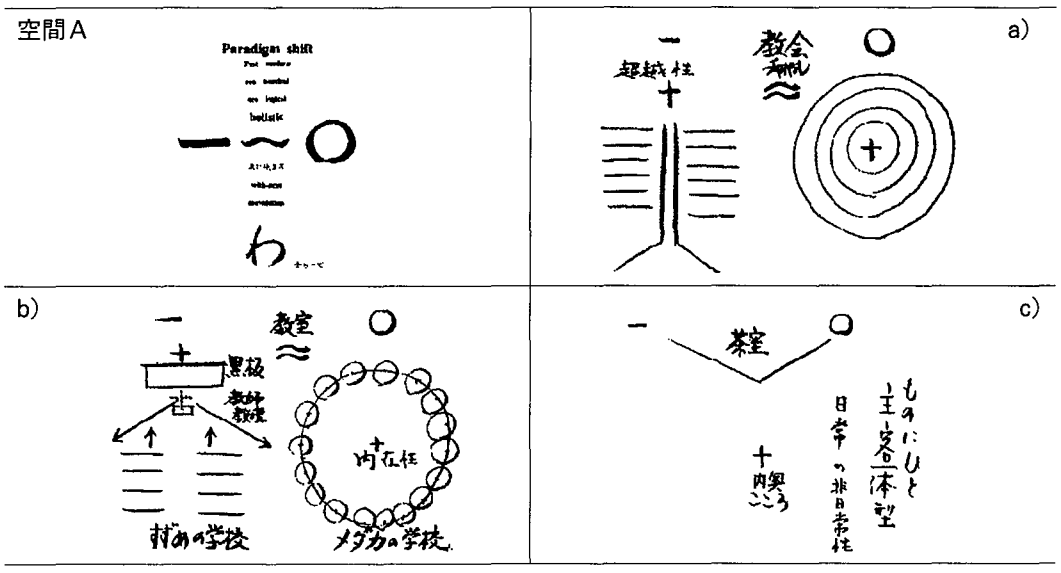
人の溜まり、出会いの仕掛け、憧憬－自己成長

見る－見られる、個－共同体



非目的空間・・・人の溜まり　教育理念の象徴、表出、出会い
見る－見られる　帰属感－解放感　空間Ｅ

南山大学人文学部心理人間学科教室設計提案　笠嶋淑恵



〈ヒエラルキー空間（－）からホリスティック空間（○）へのシフト〉　Madoca

西洋キリスト教による唯一絶対的真理（神）の探求という学問史や西洋の科学知の伝統を踏まえつつも、現代の西欧化国際グローバル社会は、更に、正解・正義が唯一つでない答や価値観・リアリティ・相対的真理探究ということが、学問や現在の学校教育を通して模索されている。この前提で、「真理探究と集中力の位置づけのシフト」を空間モデルで表す（ａ－ｃ）。空間における「真理」意識の位置づけ（＋印）のシフトを、その空間で志向される「学問観」「大学教育の人間観」のシフトとみなす。

ここでは、ａ）キリスト教会空間においては神の思い（十字架・司祭）の位置、ｂ）教室空間においては教師の知（黒板）の位置、ミッションスクール学校空間においては聖堂（十字架・神意にかなった人間像）の位置、大学においては叡智の蔵書、図書館の位置、ｃ）茶室空間においては床の間や主客の位置関係に相当する（＋クロス印）、として、探究意識の位置付けのシフトを描いた。

ａ）教会空間においては超越神から内在神、ｂ）教室空間においては「すずめの学校」型から、「めだかの学校」型へのシフトである。ｃ）茶室空間は、日本の伝統的学問空間であり、物心／主客一体したホリスティック空間を実現している。非日常的時伝統空間と人の内奥に秘められた探究心や気づきのことばが生まれてくる。

２－ａ）教会空間

「教会」とは、本来「人々の集い」を意味し、空間はそこに集う人々の意識そのものを意味する。「見えない、が、ある」空の間である。

二元論的世界観（一）では、「真理なる神」は中央前方・真正面にして高見・上方にいる。神に従う人々は前方に向かって横並びする。一方、生命論的（○）、脱近代的最近の世界傾向は、「神」は中央・真中・人々の間にいる。人々が顔を見合えるように円形・半円に輪になる。

教会そのものが「上から下へ教える権威的リーダー的存在」から「人々の意識と共にある内在的存在」へとシフトする意識のシフトがある。上智大学隣の聖イグナチオ教会の改築（2000）前と後の空間がその例である。

２－ｂ）教室空間

教会空間での人間像と教育発想は、そのまま、現代の西洋発信型学校教育制度での学校教室空間に反映している。学生の意識の中心は教室の中央・前方・高見に向ける。真理を写し取る黒板に、神キリストの代理人なる教師が立つ。教壇は高く、見えやすくする。

（一）神＝キリスト十字架＝教師と黒板（序列、階層の秩序）＝教壇＝机＝椅子＝学生の頭＝前方向き＝真理外在型・顕示型教育・情報提供型教育・リーダー：指揮指導によるリーダーシップ（すずめの学校型）

（○）神＝キリスト十字架＝輪の中心（無の空間）＝学生の全身＝向き合う＝真理内在型・創造的共育・情報交換型教育・コーディネーター：場つくりによるリーダーシップ（めだかの学校型）

という構図になる。21番教室での人間関係科スタッフ・学生のクラス風景であった。

２－ｃ）茶室空間

禅や和の精神を介し、日常茶飯事の行為の意味化をしていく。「人が茶を飲む」という日常性の抽象化・意識化・意味化を行っている。真理の所在が内奥して奥義・秘儀となる。

茶室は、行（practice）と講義（lecture）の統合された、主客一体型の学習空間の例となる。茶室は、大学空間においては祠空間となる。全体とのつながりの中で「篭もる空間時間人間の存在」のシンボルである。学校空間では、保健室、静修室等がその精神性を担っている。

２－ｄ）幻空間

Internet、dream、meditation、image-work、healing art、沈黙、祈り（医の理）等、Human Life Science & Life Fantasy・いのち論ワーク・生命科学論・和学の空間をプランすると、リアルなもの、バーチャルな体験、その区別、隠喩、神話、語り部との取り組みが保障される空間が必要になる。現時点では、ワーク中「眼を閉じる」ことで、各自がその空間を実現する。

ホリスティックな空間は生まれて消える。その場に身を位置づけることで、そこでの時空間や人間の意識は協働する。そのようなリアリティのあり方である。外在型はある規範を持たせる場合で、内在型の場合はその空間から醸し出される自由な発想が表出される。ポストモダン志向の生命論的シフトは、真理の実在、即ち、リアリティの表出の位置付けが、外在型から内在内発型へのシフトである。一人一人の中に正解が現われて共鳴する場つくりの師弟像である。

小野寺（2002）によると超越的内在より内在的超越（西田）、自己超越的という内在（粕谷）へのシフトであり、「無の場所」はキリスト教の観点からは「聖霊（神）の働く響存的世界」だという。人間の実感する時空間における神性と人性の「一体化」「成る」という生命的な認識法である（まどか　1997）。人間性を尊重していくことは同時に、人間性にある宇宙性や神性の尊重と意識化教育、霊性教育を内包していくことになる。大学空間においては、ｄ）幻空間と称して、コンピューター・祈り・タイムシフト・アート・映像空間の工夫と、研究者／発明家／人々の専門領域を超越した共同プロジェクトが今後の課題である。

精神 Mind・Spirit は言語化論理化教育や身体的意識化（行動）を促がす。しかし、精神性（精神といわれるものの本質）Spirituality、日本語の霊性・いのち・魂・根は、論理的言語より体言（名詞）や単音、音・色彩言語・香・味・触覚などの五感教育、ボディワーク、伝統文化伝統宗教の修業法・呼吸法、直観や集中力が齎す第六感（日本ではハラの力）、第七観教育による自己理解・人間理解が促がされる。リアリティの位置付け方により、研究探究法や学問の一方法としての科学や宗教の範疇は変化するだろう。大学教育に求められる発想転換は、このような様々な「ことば」や「術語の使い方」への柔軟さと取り組みである。

近代的精神と共に大学社会に科学的精神が育った。科学は、人間の生命を研究対象化した生命科学の台頭・医科学の自然科学的発展をへて、「いのち」と取り組む段階にいる。

３．南山大学Ｄ51教室空間（2000新築～）のホリスティックな教育効果（学生の反応）

21世紀の科学や大学のＦＤに向けて、ホリスティックな生命論的発想の学問探究途上で、「場」「集い」の力（帯津、まどかソサエティ）や、教育というものを空間的視点（グラバア）で捉え、以上、空間提案を得た。（空間Ｂ、Ｃ、Ｄ笠嶋、空間Ａまどか）。

2000年に新築された「多目的大教室」は、Ｄ51教室という通し番号で呼ばれている。ここに紹介した笠嶋設計提案は、実際には、実現の運びに至らず、南山大学多目的教室（大、中、小）の原型は従来の天井と蛍光橙が並列された白色天井の方形教室である。時間的経済的全学的組織運営上等々、正にホリスティックな連携が、大学空間つくりの過程でも問われる。

しかし、この多目的大教室を利用する大学生や社会人には、大学の教室空間として未だ新鮮でポジティブな反応が

資料－3　〈受講生の反応〉　2002. 7　学生による授業フィードバックと自己評価点検より。

受講科目名「人間の尊厳科目：いのちとことば」・「テーマ科目：異文化との出会い：日本との出会い」
受講生　各100名　担当：M. ASSEMAT（資料3協力：中村佳代）
教　室　D棟51（但し、この小論の笠嶋設計提案は実現の運びに至らなかった／清水建設2000落成）

〈教室空間・場の力を生かした授業に関するフィードバック〉
* 自分の空間を意識的にとって、自分に集中するというスタイルの授業は今までになく、とても新鮮。(N. N)
* まずこのD51（ジュータン張り）の教室に驚きましたが、とても新鮮で、また授業スタイルも私にとっては新しく、とても楽しく授業を受けることができた。(A. K)
* カーペット敷きの教室で、先生は教室の真ん中で話をするし、授業もユニークで、面白かった。(M. I.)
* 自分の中で意識革命が起こった気がした。(K. S.)
* 主観的、客観的、両方の視点からものごとを考えることの大切さが分かった。(Y. N.)
* この授業は自分を見つめるいい機会になりました。(S. Y.)
* 授業を受講して素直に自分のためになったと思った。ありがとうございました。(Y. T.)
* これまでの知識の「詰め込み」という世界から離れて、自分の心底にある魂を呼び起こすような授業を受けることができ、本当に貴重な体験ができたと実感している。(Y. K.)

〈いのちのテーマの授業形式に関するフィードバック〉
* 「いのち」というテーマは、重過ぎて苦しく感じることもあったが、いのちについて考えることの大切さを感じた。(H. S.)
* 「死」について、普段から何気なく考えている自分に気づいた。(K. T)
* 普段「死」についてはあまり考えないようにしているので、授業で改めて考えることができて良かった。(T. H)
* 「いのち」についてたくさんの人の意見を聞けた。答えは一つではなく全員の考えが正しいと思った。(K. T.)
* 普段は具体化されることのない「生と死」への自分の考えが、絵を描くことやロールプレイではっきりとした。(C. O)
* 普段考えないようなことを、改めて考える時間が先生の授業の良いところだと思った。(K. K)
* 学科での勉強とは全く違うものでありながら、人間として一番考えなくてはいけない問いを学ぶことが出来た。(Y. O.)

〈講義形式でない空間の活かし方に関するフィードバック〉
* 講義形式では伝わってこないものを感じることが出来た。(M. I.)
* 小グループのみではなく、大きなグループでの意見交換もしてみたかった。(S. O)
* 後半の授業では、生徒に任せている印象を強く受けたが、もう少し情報をもらえたらうれしかった。(S. M.)
* せっかく他のクラスとは違った持ち味の授業なので、定員を減らすべきだと思います。(Y. A.)
* こんなに長いレポートを書いたのは初めてで、それは今回得たものの大きさを示している。(R. H)
* 画用紙に描くという作業は体の力が抜けていつもと違うところが動いている感じがした。(Y. I.)

見られる（資料3）。空間メッセージのある教室、又は、いのちへの気づきや、人とのかかわりの生まれやすい教育環境となる空間の性格が受講生自身にとっては生かされている。

教育的効果は日常性から非日常性への離脱時の集中力・直観力による。非日常ではあるがそこでの自分は非現実ではない（山口真人、人間関係科　1990)。これらの声やうなずきは、本来の自分の本質を表明する声であり、「畳の部屋は『やっぱりいい』ですね」という現代にとっての目新しさ、非日常性の齎す意識の覚醒とも取れる。「大学なのに……」という学生の学校教育通念自体が解体していくことからの学びもある。学生・学者・教職員構成メンバー同士は一つの社会単位でありながら社会から隔離されて知的行為が守られ保護確保された小集団で、同じ時空間での共同生活者同志でもある。かつての寺院・修道院・武家・宮（廷）の機能である。家族メンバーとは異なる共同体、様々な人々との出会いのもたらされる拡散性と集中性が同時に実現する時空間の確保は教員の意識にもよる。

高等教育を人間の意識の深まりや高まりという成長や成熟の場と捉えるならば、現代の人間像のもう一相のスピリチュアリティ・霊性、更には日本人本来の持つ調和力への研究教育アプローチが模索される時代にあることを研究者・教職員・学生共に自覚しておきたい。

筆者等は、ここで生命論的パラダイムの授業や、人間関係科が27年間培った体験学習 Experiential Learning による人間関係の実践的学習を、新たに大学人文学部心理人間学科カリキュラムとして展開して2年目である。現時点では受講生の声の紹介に留める。学部学科を基盤としているキャンパス空間故にこそ、学部学科・通常科学の方法論の

枠組を超え、「一人の人間であることの原点」が実践的理論的に問われる場を、カリキュラムに設定することは、「生命」「人間」という複合領域的テーマゆえに可能であり、必要である。「学生・教師／研究者という役割意識」が問われる訓練と「ひとりひとりの人という自己統合意識」が問われる場との協働があることで、大学や研究機関をより自由な思考空間・創造的集中力・直観力の醸し出されやすい空間にしていくことになるだろう。

集中力とは、人の力・エネルギーの頂点であり、リアリティへの覚醒と、アイデアの創出する時空間を齎す。人間の自己「統合力」「総合力」であり、天空・宇宙・地等「見える自然と見えない自然」（村上和雄）や、「霊的直覚・自覚、霊性」（鈴木大拙）即ち、物質と精神の統合力とも繋がる。このような集中力を生み出す空間・時間・人間一体の環境が生まれてはじめて、日本における『大学』『高等教育の場』と呼び得る。建物のみでは「空間」は成り立たたず、空間は時間と人間の本質と繋がって成立し、いきづいていく。

この空間提案の実現と、高等教育での効果の言及は、今後の課題であり希望である。（まどか ASSEMAT）

〈参考文献〉

安藤忠雄『建築を語る　命ある建築をめざして』東京大学出版会、1999年、202頁

アルバート・ズスマン著、石井秀治訳『人智学講座　魂の扉・12感覚』耕文社＋イザラ書房、第2刷2001年

ブルーアー，J.T.、松田文子・森敏昭監訳『授業が変わる　認知心理学と教育実践が手を結ぶとき』北大路書房、1997年

CAPRA, F. & CALLENBACH, E.、露田栄作編訳『ディープエコロジー考　持続可能な社会に向けて』佼成出版社、1995年

カプラ・フリッチョフ著、吉福伸逸・田中三彦他訳『ターニングポイント』工学舎、1984年

布野修司『戦後建築の終焉 ── 世紀末建築論ノート ──』れんが書房新社、1995年

GIEDION, S. SPACE, TIME AND ARCHITECTURE The fifth edition（太田實訳『新版　空間　時間　建築』～個と集団の領域～　丸善、1981年、960頁）

ガストン・バシュラール著、岩村行雄訳「空間の詩学」思潮社、原著1957年、第5刷1972年

グラバア俊子「ボディワークのすすめ」創元社、1988年

グラバア俊子、まどか庸代、川浦佐知子「教育における空間研究」『南山短大1999年度フラッテン奨励研究報告』、2000年1月

井上章一『アート・キッシュ・ジャパネスク　大東亜のポストモダン』青土社、1987年

笠嶋淑恵「大学に求められる空間の性格」（特別研究会）『人間関係』第17号、1999年

笠嶋淑恵「どう見えるかからどう感じられるかへ」『新建築』1987年12月号

川浦佐知子「トラウマとしての自然破壊」南山学会、2000年7月

まどか庸代「科学における『自己』の位置」南山懇話会留学報告会、1995年1月

まどか庸代「生命科学基礎論へのもうひとつのアプローチ ── 内在性重視の生命論プログラムの開発 ──」『上智大学生命科学研究所紀要』第9号、1990年

まどか庸代「Life Science & Life Fantasy 言相と幻相」『南山短大紀要』第22号、1997年

まどか庸代「いろはワークと和学いのち論形成」『人間関係』第17号、1999年

Madoca ASSEMAT, M.「Holistic Life Science as a *japonolojical* Epistemology, *Wa-gaku*: Self-integration through Behavioral Science in *Wa-go*」『Proceedings of the 4th International Conference of Health Behavioral Science "Integrated Approaches to Health"』Japan Academy for Health Behavioral Science, 2001, pp 176-179

まどかアッセマ庸代「和学事始　和語いのちによるライフサイエンスの自己風土化と関係的生命観」『南山大学アカデミア　自然科学・保健体育編』第10巻、2001年

まどか ASSEMAT, M.「和の霊位、和のスピリチュアリティ模索～つながるいのち2002環境と健康～」『上智人間学

紀要』第32号、2002年
松浦昭次『宮大工千年の「手と技」』祥伝社、2001年
中嶋宏、小川晋也他『健康と霊性』宗教心理出版、2001年
南山短大人間関係科監修『人間関係トレーニング ── 私を育てる教育への人間的アプローチ ──』ナカニシヤ出版、1992年
南山短大人間関係研究センター『人間関係』創刊号～第17号、1984～1999年
南山大学人間関係研究センター『人間関係研究』創刊号、2001年
日本ホリスティック医学協会編『生命のダイナミクス』柏樹社、1990年
小野寺　功『絶対神と神　京都学派の哲学』春風社、2000年、101頁
鈴木大拙『日本的霊性』岩波文庫、1972年
高橋　巌『シュタイナー教育入門』角川選書148　４版　1985年
Teilhard de Chardin, P. LA VISION du PANSEE, Seuil, Paris, 1957（山口敏訳『過去のビジョン』みすず書房、1971年、213、267頁）
津田重域「ＷＨＯ憲章における健康の定義改正の試み」『ターミナルケア』第10号(2)、2002年、91頁

〈註ｉ〉

グラバア俊子　現在愛知県自然保全審議会（現：愛知県環境審議会）審議委員。
愛知県ふれあいの森整備検討会議委員～2000。

笠嶋淑恵　現在名古屋市景観審議会委員。公共建築賞中部地区審査委員1999. 2001、日本建築学会作品選集本部審査委員1997. 98、愛知県地方計画委員会専門委員1997
「濃尾平野の家」等にて中部建築賞（1983、89、93、94、95年）、「２つの空」小原村編にて中部建築賞・愛知まちなみ建築賞受賞（1995年）など受賞作品多数。

笠嶋淑恵　「ホリスティック医学ブース、ガイアブース、愛と叡智の未来共同体ブース」2002年１月、名古屋ドーム

まどか庸代　現在名古屋市公共事業評価監視委員。元建設省道路局長期構想研究会名古屋市道づくり路懇話会委員。

まどか庸代　「持続可能な循環型社会をめざして～いのちのつながり～」大学生討論会企画進行『つながるいのち ── 環境と健康 ──』明るい21世紀連絡会議理事、ホリスティック医学ブース企画運営、2002年１月、名古屋ドーム

〈註ii〉

南山大学人間関係研究センター2001～2002年開講講座名：人間関係講座（グループ、コミュニケーションプロセス）、Ｔグループ、ファシリテータートレーニング、カウンセリング的対話、母親ノート法、ボディワーク、ホリスティック生命論ワーク：和学研究会、エコサイコロジー：コスモロジー編、ゲシュタルトセラピー、ＴＡ交流分析等の他、公開講演では、国際協力、ガイア、死刑制度、遺伝子研究と大自然・人間のテーマを扱った。

〈註iii〉

笠嶋淑恵による本設計提案は、大学将来構想において、南山短期大学人間関係科が南山大学人文学部心理人間学科として2000年４月開設に向けての教室棟増築計画検討会議のために、人間関係科側コミッティ研究からの求めに応じて1998年作成された。

尚、　この研究の一部は平成十一年度南山短大フラッテン研究奨励による。

高等教育を空間的視点から見る経緯　～実感ある教育実践の立場から～　Glover 俊子
大学に求められる空間の性格　～建築空間の視点から：空間提案～　笠嶋淑恵
大学教育・研究共同体に求められる発想転換　～学問論・意識創生の場の視点から～　Madoca